

ルールメイキング

京の祇園祭が終わり梅雨が明け、本格的な猛暑の夏がやってきた。テレビはほぼパリ五輪一色で、あまり興味のない私でも寝不足になりそうである。人は、優秀なトップアスリートには豊かな人格も求めてしまう。大谷選手の活躍と言動には「神対応」なんて表現もあるが、離婚問題で庶民感覚を逆なでした羽生結弦はメディアから姿を消している。

体操女子五輪日本代表宮田選手は、喫煙と飲酒で五輪代表辞退を余儀なくされた。協会は処分を下していないので辞退と言う表現になっているが、どういう話し合いがなされたのかは定かではない。世論は圧倒的に宮田選手擁護が多い。若狭勝弁護士や有識者などは「たかが喫煙・飲酒で五輪資格はく奪は厳しすぎる」「未熟な世代は問題を起こすもの。まわりの大人が守るべき」「規約違反だが諸外国では出場辞退にはならない」など、協会批判と違反の軽さに言及している。一方、橋下元大阪市長は「これは団体規律の領域で、喫煙・飲酒の法律違反の問題ではなく辞退やむなし」、十種競技元日本チャンピオン武井壮は「遠征などの競技団体支援の原資は血税、その自覚がない」など、宮田選手への批判も根強い。

しかし問題は未成年の喫煙・飲酒や処分(辞退)そのものの重さレベルではなく、ルールメイキングではないかと思う。

宮田選手の辞退ニュースを聞いた誰もが同情の意味も含めて「もったいない。考えれば分かることなのに、バカだなあ！」感じたに違いない。ではなぜ、自分自身で考えることをしないのか、さらに自分の立場などを認識し自分を守ろうとしないのか、これは画一的な教育が自分の頭で考えない国民をつくってきたからではないかと、「バカの災厄」の著者：池田清彦は指摘している。ルールは「作り守らせる側」と「守らせられる側」とに明確に二極化している。規則に内包されている意味や意義を問うこともなく、「作り守らせる側」が作ったルールを一方的に考えることなく守られる画一的な教育を受け続ける限り、「規則を守る」ことのみが評価を受け、とりあえず「よく分からないけど従う人」が育っていく。

「体操協会」と「選手会」が規範(ルール)作りに共同的に取り組むべきであることは、高校での揺れる校則問題とも共通する。私は今回の出来事を「協会批判」や「自業自得」に終わらせることなく、ルールメイキングレベルまで踏み込んだ捉え方をしたいと思う。

豊翔高等学院には校則はない。校則(規範)が必要な状況が生じれば、生徒会と教員集団で集团的に協議して、生徒が自ら守ろうとする内容の校則を作りたいと考えている。

(丹羽 豊)